



「サーロー先生の思い出を語る懇談会」に参加して

池田 裕子

9月17日午前9時から11時過ぎまで、「サーロー先生の思い出を語る懇談会」(Zoom)がトロント、ニューヨーク、西海岸、日本を結んで開催されました(参加者14名)。J3 宣教師として来日され、1952年9月から55年5月まで中学部で英語を教えられたジム・サーロー先生(James

McKittrick Thurlow, 1928~2011)の教え子が当時の思い出を語って、トロント在住のご遺族、奥様の節子さん、ご次男アンドリュー[アンディ]さんと懇談されました。

節子さんは、2017年にノーベル平和賞を受賞した核兵器廃絶国際キャンペーン ICAN 創設時からの主力メンバーです。事務局長と共に記念メダルと賞状を受け取り、受賞記念講演をされたことから、当時、私は何人かの卒業生からこのような問い合わせを受けました。「ノーベル平和賞を受賞されたサーロー節子さんは、中学部で教えておられたサーロー先生と関係ある方ですか?」。

2020年春にサーロー節子さんを関西学院にお招きして、名誉学位と関西学院賞を授与し、ご講演いただくことになった時、同窓会東京支部は、東京で教え子が集まって、サーロー先生の思い出を節子さんと語り合いたいと考え、準備を始められました。その思いを知った節子さんは大変喜ばれ、息子二人にも聞かせたいので録音してほしいとおっしゃって、東京での再会を楽しみにされていました。節子さんによると、関西学院中学部での3年間をご主人は特別な思い出として終生懐かしんでおられたそうです(サーロー先生は、1957年に宣教師として再来日し、62年まで関西学院大学で教えています)。

残念ながら、新型コロナの感染拡大のため、節子さん招聘は実現できない状態が続いています。そこで、対面が叶わないならせめて文字でと考えた教え子20名(主に関東と海外在住)が寄付を集め、『サーロー先生思い出集』(日本語・英語)を制作され、トロントの節子さんに送られました。バイリンガルの文集を受け取られた節子さんは感激され、南井克之さん(1963年経済学部卒業)と共に編集を担当された三浦一男さん(1965年経済学部卒業)に電話をかけてこられました。その結果、このZoom懇談会が実現したのです。

私はサーロー先生にお会いしたことはありませんが、節子さんとは2014年の来日時に山崎住夫さん(1964年文学部卒業)からご紹介いただき、その後何度かメール等のやり取りが続ききました。ですから、節子さんに連絡を取りたいと、東京支部長の山中英雄さん(1969年法学部卒業)から2019年に相談を受けた時、山崎さんをご紹介しました。文集制作にあたっては、学院史編纂室所蔵の写真や資料を三浦さんに提供し、寄付にも協力しました。そうしたご縁で、私もこのZoom懇談会に参加させていただきました。

懇談会は、天国のサーロー先生を中心に参加者の心が一つになったような温かい雰囲気に包まれました。進行を担当された三浦さんも、和やかに参加者の話を引き出されました。節子さんは事前に原稿を準備され、ご主人がどんな方だったか一つ一つ思い出すように読み上げられました。アンディさんは、文集を英語でも読めるよう制作したことに対する深い感謝の気持ちを表され、カナダで2,000人の学生を教えたお父様の原点は関西学院中学部での3年間にあったと、英語で語られました。

教え子から直接話をお聞きして私が大いに納得したのは、“Thurlow”という発音が大変難しいということです。最初に習った英会話の先生の名前が難しかったおかげで、英語の発音が身についた、海外で発音を褒められた、仕事で役立った…と口々におっしゃいました。節子さんご自身も、自分の名前なのに未だに上手く発音できないと笑っておられました。また、久山康院長時代に、関西学院教職員が海外諸大学視察旅行でトロントを訪問したことを喜んでおられたのも印象に残りました。「いつでもトロントに来てください。大歓迎です」とおっしゃって、次こそ直接お会いしたいとの思いがお互いに一層強まったことと思います。

最後に、8月に行われた国連での核不拡散条約(NPT)再検討会議の話伺いました。節子さんは、核廃絶と核抑止の根本的違いを厳しく指摘され、世界の人々が日本人を見つめていると、熱く語られました。

【学院史編纂室】

